https://rodosoken.com/

というものである。この自立したコミュニティ同士を結びつけるグローバルな経済原則として、筆者は「フェアトレード原則」の確立を説いている。

以上が評者が取り出した本書のエッセンスである。平易な語りかけ方といい、丁寧な事例の示し方といい、本書が良質のテキストであることは疑いない。そして単に地域政策という領域の入門書というだけでなく、現代日本経済論、現代日本社会論の入門書としても優れたものである。本書の内容が読むものにリアルに迫ってくるのは、筆者の非常に手堅い実証的研究（日本だけでなくアジアやアメリカなど）に裏付けられているからであろう。巻末に示された膨大な調査研究の報告書などがそれを示している。

ところで小泉「構造改革」によって推進されている現実の地域政策は、筆者が呈示する方向とは逆の方向に進みつつある。地域の社会的生産基盤の崩壊がいっそう加速されようとしている。この流れを反転させるには、まだそれほど多くない成功事例を増やし、またその成功の意味を多くの人びとの確信にする活動を広げる必要がある。そのためにはまず日本社会のなかに「社会的生産基盤の再構築」のパートナーシップを形成できないものであろうか。本書が、そうしたパートナーシップの形成の接着剤になることを期待したい。

（法律文化社、2003年４月刊・2500円）

（はまおか　まさよし・常任理事・佛教大学教授）

原富　悟著

『トミさんの社会保障談義』

公文　昭夫

とにかくタイトルがいい。「トミさんの社会保障談義」とくれば、長屋の女将さんの井戸端会議、そこにハチ公やクマさんがからんだ「かけあい」さながらに、とんとこむつかしい社会保障のなかみをスパッと絵解きしてくれる。年金から医療、失業、介護、労働災害から、社会保障制度と連動する消費税、最低賃金制、雇用対策、退職金問題、はては憲法にいたるまで、レパートリーの広さ、メニューの豊富さ。いったいこの人の頭の構造はどうなってるんだろう、とあきれたり、感心させられたりする。

「トミさん」とはいわずと知れた埼玉県社会保障推進協議会の副会長（前事務局長）、そして埼玉県労働組合連合会の事務局長をやっている原富悟さんである。

もともとトミさんは書いても、しゃべってもユニークで、軽妙洒脱。抜群の行動力の持主だが、その根っ子は「ヨメさんや子どもや遠くに離れて暮らす母を愛し、生活の場でふれあう様々な人を愛し、社会運動の中でともにたたかうたくさんの仲間を愛し（第１巻・はじめに―時に遅れず追い越さず―）という深い人間への愛である。彼に言わせれば「社会政策や社会保障運動はそのようなものだ。日本国憲法は、そのようなものとして象徴的だ」となる。

「饅頭屋さんに強盗が入った。……“カネを出せ”。加えて“腹が減った。酒が飲みたい”。そこで店員が1000円札を出し、饅頭を一箇差し出した。強盗は涙を流して感謝した。……悪人になりきれない“強盗さん”の話は何とも切ない」というプロローグから、生活保護を出さない行政的「しめつけ」（123号通知）が、多くの自治体にそんな制度があることを「知らせる」義務を放棄させた、と指摘する。

また第２巻では「フツーの働き方で過労死するような状況は病人を増やし給付が増える。過労死するほど働いているのに賃金が下がり、失業者も増加しているから社会保険の財源（収入）は細る。訓練されない素人でも泥棒で稼ぐ方が“実入りがいい”ような社会状況が……社会保障制度を掘り崩している」と言う。

全２冊の「トミさん談義」は、わかりやすいだけでなく、しっかり図表を載せ、職場や地域でのケンカの仕方（要求獲得のマニュアル）まで教えてくれている。専門家から素人までぜひ読んでほしい力作である。

（埼玉県社会保障推進協議会・2003年７月刊・各500円）

（くもん　てるお・会員・年金実務センター代表）